

北上川流域一斉清掃



川に関心を高め、水害被害の歴史を風化させず次世代につなごうと、県内の北上川流域で5月19日、一斉に清掃活動が行われました。市内では川崎町と狐禅寺で実施。川崎町ではボランティア120人が小雨の中、力を合わせてごみを拾いました。

かわさき夏まつり花火大会



夏の夜空と川面を彩るかわさき夏まつり花火大会(8月16日)。カスリン・アイオン台風60年事業実行委員会提供花火を含む1万発が打ち上げられ、川岸に「カスリン60年」の文字も炎で描かれ、犠牲者を弔いました。

流灯会・夢灯り



水難物故者や初盆を迎えた故人をしのぶ流灯会は8月20日、磐井川河川公園で行われました。(関連記事1ページ)。一関夢灯りの会主催の夢灯り大会も行われ、災害のないまちを願って灯された約500個のキャンドルが幻想的な光景を作り出しました。



浸水表示板除幕式

カスリン、アイオン台風による水害の水位を示す浸水表示板がJR一ノ関駅の駅前広場に設置され、8月20日、除幕式が行われました。カスリン・アイオン台風60年事業実行委員会が行ったもので、市民に水害の恐ろしさや復興への努力を伝えようとするもの。関係者約30人が出席した除幕式で、浅井市長は「表示板の設置を通じ、水害から復興を遂げた先人の勇気と努力を忘れないための道しるべとしたい」とあいさつしました。

表示板は高さ3m、幅1.1m。同じものが駅東口にも設置されたほか、市内9カ所に水位を表示するプレートが取り付けられました。



砂鉄川一握築堤

砂鉄川堤防の概成を記念した河川愛護活動「水害を忘れない地域活動」は7月22日、川崎町の砂鉄川坂田排水ひ門付近で行われました。流域の住民ら約60人が参加し、河川敷の清掃、草刈りと桜の植樹を行いました。

その後、「一握築堤」を実施。参加者一人一人が、スコップ1杯程度の土を堤防に運んで敷きならし、治水への思いを新たにしていました。

現在、堤防の高さは暫定高の23.8m(完成高は25.8m)。伊藤靖一砂鉄川土地利用組合長は「たくさんの方々の協力で立派な堤防が築かれた。水害を風化させないよう後世に伝えていきたい」と話していました。

市水防訓練



6月2日、大規模水害を想定し、水防隊、関係機関、自主防災組織の連携の下に一関遊水地周囲堤で行われた水防訓練。北上川下流の石巻市でも同日訓練が行われ、両市長がテレビを通じてメッセージを交換し、水防体制の充実強化を確認しました。

遊水地小堤着工式



水害常襲地帯の一関地方を水害から守ろうと昭和47年着工した一関遊水地。10年に一度程度規模の水害から農地を守るための第2・第3小堤着工式は7月31日行われ、関係者が工事開始を祝いました。

一関夏まつり



水難物故者の慰霊を起源の一つとする一関夏まつり。今年のフィナーレとして8月5日、6年ぶりに水天宮神輿の川渡し渡御が行われました。神輿は夕陽を浴びながら威勢よく磐井川を渡し、詰め掛けた見物客から拍手が寄せられました。

60年目を振り返る

数多くの市民が参加して60年治水大会などを実施 防災から「減災」へ

水害被害を風化させることなく後世に伝え、災害に強い地域社会を作っていくこと「カスリン・アイオン台風60年事業実行委員会(実行委員長・浅井市長)が3月23日、組織されました。市、県をはじめ、一関商工会議所、NPO法人北上川サポーター協会、みんなでミュージカル実行委員会など、行政、川に関係する市民団体など18団体で構成。60年行事や関連行事として、さまざまな催しを市内外で行っています。

そのメイン行事として、「カスリン・アイオン台風60年治水大会」というほく★地域を守る防災コンテスト2007「市民ミュージカル」今伝えよう一関の年輪」がそれぞれ行われました。

「カスリン・アイオン台風60年治水大会」防災・減災対策を考える」は9月15日、ベリーノホテル一関で行われました。「防災・減災フォーラム(国土交通省東北地方整備局主催)とカスリン・アイオン台風60年治水大会(同実行委員会主催)の2部構成で開催された大会に市民、関係機関などから約800人が参加。水害の悲劇を後世に伝え、地域防災力向上と治水対策の早期整備に取り組んでいくことを誓いました。

平山健一岩手大学長をコーディネーターとするフォーラムには達増拓也県知事をはじめ5人のパネリストが参加し、災害に強い地域社会を構築するための方策について意見を交わしました。

達増知事は「防災教育、自主防災組織による地域防災力向上が大切」と強調。

浅井市長は自身の水害体験を振り返りながら「本庁・支所の連携を図り災害に対する機能の強化を進めていく」ときっぱり語り、門松武国土交通省河川局長は地球温暖化による集中豪雨の増加、水防体制の弱体化により社会が災害に弱い構造になっていると指摘しながら「被害ゼロの「防災」でなく、被害を小さくする「減災」に考えを改めなければならぬ」と主張しました。佐藤暁一関商工会議所副会頭は「磐井川堤防改修を、単に治水だけでなく、新たな地域づくりのチャンスととらえ、100年後を見据えた中心市街地整備の契機として」と力強く述べ、首藤伸夫日本大学大学院教授は「水との付き合いは、昔は自助が基本だった。都市化とともに公助に頼るようになったが、これからは共助が大切」と訴えました。

60年治水大会では浅井市長が「あの大きな災害を繰り返すことのないよう治水事業や防災、減災に努めていく」とあいさつ。災害体験を伝える活動に貢献した故横田實さんと「みんなでミュージカル実行委員会」に感謝状が贈られたほか、水害の体験談の発表、安全・安心に向けた次世代へのメッセージが読み上げられました。

9月16日、一関文化センターで行われた「とうほく★地域を守る防災コンテスト2007」には市内3団体を含む11団体が参加。そのうち一関工業高土木科の「河川情報マップ『アイ・MAP』」が防災力アップ賞に輝きました。



上/達増知事ら5人がパネラーとして災害に強い地域社会について討論した防災・減災フォーラム
下左/水難物故者供養に演じられた毛越寺延年の舞(60年治水大会) 下中/2組に感謝状を贈呈(60年治水大会)
下右/防災コンテスト2007で双方向の河川情報システム「アイ・MAP」を発表した一関工業高土木科